

鈴木とく先生が遺した保育実践記録を読む

— 第五十一巻第七号（一九五二年七月）より —

二〇二二年六月二十八日、日本を代表する保育実践者、鈴木とくが、百二歳で他界した。明治生まれ、生涯独身、保育に生きた「とく先生」。戦前戦後を通じて子どもを命がけで守り、親からも全幅の信頼が寄せられていた。彼女のような先人の英知が、日常実践として、今日も保育の場で生き続けているのだと思う。

保育実践研究者の浦辺史は、鈴木を次のように紹介している。「鈴木とく、といえば、故秋田美子、故珠川善子、根岸松枝（現山下草笛）とともに、戦後日本の保育者として、厚生省の保育指針や保育講座の執筆者として、また、保母の養成、研修の講師として保育界でよく知られている。（中略）国文学を専攻した彼女は、詩をかいたり、童話を創作したり、丹念に保育ノートを書き続けていた。今から四〇年も前の保育を、不確かな記憶に頼って思い出を語るのではなく、記録により事実に基づいて書いている。それだけにこの本は、戦前の民主的な保育の創造について、保育者自身が体験を語るといふ意味で日本の保育史の上で貴重な資料といえる。」（鈴木とく『感傷はいく野迷いあるき』全国社会福祉協議会 一九七五年 より）

本誌上に掲載された鈴木木の考察もまた、保育界にとって貴重な資料に違いない。異年齢保育や母親の会、民主的なクラス運営の草創期の様子、また保育研究者には見えない実践者の視点についてなど、時代を超えて、あるいは今だからこそ学ぶことの多い考察である。

（尚敬大学短期大学部 塩崎美穂）

……二十五人の三才児に、一人の保母が手順よく、他の組にめいわくをかけずに、生活訓練や集団生活の指導をしようとしても、とても容易な事ではない。そんな事から、保育所は大半が家庭的な生活であるとの理屈をつけて、地域別グループをつくり、年長、年少の、同情と協力の生活をさせた事が、保母の手助けとなって人手不足を補ってもらえたり、母親の一部から、お勉強をさせてくれない——折紙を教えたり、字を教えたり、歌や遊戯を教えたりしてくれない、——と不平をもらす人がある事から、年齢混合のグループ生活を、間違つた事をしていく様に感じられて、その中で年齢別にする保育もとり入れたりしたが、何とも云えない和やかな家庭の様なものを感じるこのグループ保育に、今もなお愛着を覚えるのである。街頭に出れば、社会に出れば、常に、同年齢の安定感の中にのみ生活は出来ないし、不安定や、困難を克服した喜びの上に、なおそれ以上の、力や創造への憧れが湧き上るのではないか、そう云う強さも養われる必要があるのではないかと云う考え方が、批判もうけずに私の中にあるから、生活指導の上での年齢混合保育をすて難いものに感じるのかもしれない。

こんな頃の、幼児との生活の日記や感想から、若い方達が昔嚙を読む様な興味を覚えてくだされば、難しい保育理論のあいまのなぐさみに、軽い討論の種ともなるかもしれない。

一九三五年七月

地域別グループをする事で、二時間も話し合った。結局、お互に色々な意見はあったが、地

域を受持った保母が、幼児と共にその母をも受持つて、幼児の保育の効果を上げると共に、母親の生活改善と、生活向上をも計って行かなければならないと保育所と母の会の連関について意見が合い、生活と団体の訓練を、主な目標とした保育を試みようと言ふことに大体の意見の一致をみた。云い出しはしたものの、なんだか今後のやり方について不安も感じる。(略)

一九三六年五月

先日からの机の片づけ方の問題を、今日は皆で決めようと、お八つを頂きながら、順々に、どうしたらいいかをきいていった。

「やらない子は、つれて来て一緒にやるの」「お当番がやつたらいいの」「みんなでやるの」

お隣りに坐っている友達の真似をして云う子もあつたけれど、次々に云つてくれて嬉しかったが、全部が云い終らない中に、用事が出来て、子供達からはなれなければならなかつたので、みんなの言い分もきかず、いろいろと話合もせず、中途で悪いなと思つたけれど「男の子がお机を運ぶ時は、女の子がお椅子、次の日は反対に、そして順々にして行きましようね。そして、どの子も、どの子もみんなで、お片づけをしましようね」と、決めてしまった。

用事がすんで帰つて来たら、大きい子達が側へ来て、「センセ、今日は一等だよ。みんなでやつたよ」と。早速報告してくれた。

「そお、よかつたわね」と云つたけれど、何か子供におしつけてしまった様な感じていやだつた。も一日延ばして、明日又、お八つの時に、残つた子供達の言葉もきいて、ゆっくり、みんなと相談すべきだつた。決められ、おしつけられた言葉は、その時文で、ほんとに、子供達自

身が、喜んで仕事をし、働く原動力とはならない。大きい方の子供達が納得して、お片づけをみんなて楽しくする様になれば、小さな子については行く。小さい子供達は、やりたくてしかたなくても、大きな、重い机を動かす丈の力がないのだ。このきめも、その中にくづれて行く事だろう。そして又、今度こそ、グループの皆で語り合つて、子供達のやって行きたい方法で、楽しくお片づけをする様に相談しよう。(略)

不況時代、戦争時代、敗戦時代と、各々の社会状態は違つても、勤労者地区の、働く母親の問題、幼児の幸福の問題、一銭と十円の単位は違つても、せがまれるままに、無駄使いさせるお小遣いと、母親の育児、家庭教育の向上の問題は、形を変え程度の違いはあつても、何時もつきまどつてゐる。(略)

最初は、例会のある度に、家々をまわつて出席を求めた母の会が、三年目には、地域の懇談会で、自分達から、勉強会の事を、講習会の事を云い出す様になつた事の嬉しさ、けれど、自分の子供の幸のみ願つて、地域の子供達の悪化には無関心であり、自分本位にものを考へて、自分の都合さえよければ満足な社会生活へ目がむかない母親達は、十五、六年前より、よいと云つても、現在もまだまだ考え方が開けてゐない。

こんなことにとりくんでいる保母さん達のために、理論家はつまらないと目もくれなくても、何処かでなされた、ささやかな幼児との生活のメモが、沢山集つたら、と思つ。そしてらかの、若い人々の胸をうつ「遥なる山河」とは行かないまでも、「大いなる果敢な夢」とても題せるのではないかしら等、とりとめもなく想うのである。